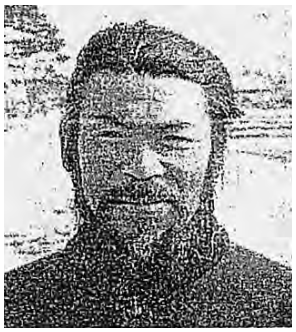

胆沢平野の開拓指導者

佐々木　辰治郎

佐々木辰治郎は、太平洋戦争後、胆沢平野開拓の道に人生を捧げ、その指導者となった人である。

一九〇四年（明治三十七年）、佐々木辰治郎は、胆沢郡水沢町（現・水沢区）で生まれた。「辰年」生まれなので辰治郎と名づけられた。家は、自作と小作を兼ねた農家だったが、生活は楽ではなく、十五・十六歳の時、仙台方面に奉公（よその家にやとわれて働くこと）に出された。

十八歳のころ、船員を目指して船に乗り、船内の雑役の仕事をする水夫となって働きながら、通信教育で航海士の資格を取るために勉強した。激しい労働と生活の中での独学はつらくて厳しいものであったが、自分の夢を実現させようと歯を食いしばって努力した。やがて、その甲斐あって航海士の資格を取り、水夫長から三等航海士になり、ついには、タンカー（油運送船）の航海長になった。辰治郎が生涯持ち続けた理想主義と不撓不屈の精神はこの船員生活で培われたものであった。

一九四四年（昭和十九年）太平洋戦争の激戦の中、輸送船団への油補給船の航海長としてフィリピンのパラワン島沖を航行中、米軍の魚雷と戦闘機からの直撃弾を受けた。船は真っ二つに割られ、辰治郎の体は海に吹き飛ばされてしまった。南シナ海を丸一日漂流しているところを日本船に救われ、やっとの思いで祖国の土を踏み、横浜の家に帰ることができた。しかし、戦争はますます激しくなったので、まず家族を水沢の実家に疎開させた。その後、住んでいた家が大空襲で全焼してしまい、自分も水沢に戻った。

航海士として二十二年間海と船で生活してきた辰治郎は、大海への未練に苦しんだが、「土の上で生まれた自分は、土の中に死ぬのは最も自然であり幸福な道なのだ。これからの半生は開拓に生きよう。」と決意をした。

戦争後の一九四六年（昭和二十一年）、辰治郎は、家族四人を連れて焼石連峰のふもと、大畑平に入植した。四十二歳の時である。

大畑平地区は、標高二百メートル前後の準高原で、火山灰のやせ土や川辺の石まじりの谷地や湿地帯の広がる「野山」と呼ばれる土地だった。開墾の最初の作業は、伐採だった。立ち木を一本一本、のこぎりを使って切り倒し、切った木で、家を作ったりまきにした

りした。次の作業は、木の切り株と根を掘り起こす抜根である。これらの作業をナタ、カマなどを使った原始的な方法で行っていたので、石拾いだけでも重労働だった。

こうした仕事を家族みんなで繰り返しながら少しずつ耕地を広げていった。なんとか畑地らしくなり、馬鈴薯や麦などの種をまいた。しかし、土地がやせているために実らなかったり、せっかく実っても強風に吹き倒されたりした。

しかし、辰治郎はくじけずに

「辰、おまえは、あの南シナ海の漂流から生き返った男ではないのか。」

と自分自身を叱り飛ばし、気を取り直しては奮起した。

辰治郎は、開拓者のリーダーとして開拓農民の組織づくりを先頭に立って行った。地元の水沢の青年たち、復員の青年たちに入植・開墾を呼びかけ「水沢小山開拓同盟」を結成し、自ら委員長となった。そのことが基となり、三ヵ月後には、「岩手県開拓協会設立大会」が、水沢で開かれ、開拓民やこれから開拓に入ろうとする人々に限りない勇気と希望、夢と誇りを与えた。

開拓者の生きる道は、同志の団結以外にないと考えている辰治郎は、私利私欲を排し、日本を占領したマッカーサー司令部からの乗船の誘いをも断って、開拓の指揮と人々の生活の保障のために骨身を惜しまなかった。辰治郎は、さらに開拓組織の拡大に力を注ぎ、県から東北地方にと広げ、全国組織へと発展させる原動力となった。ついに、開拓組織の先駆者的リーダーとして認められ、全国組織の役員に推挙されたが、

「元船員が農業団体の指導者には、ふさわしくない。」

と言って辞退し、わが家に帰っては家族と力を合わせて鍬をふるい営農に全力で取り組んだ。

一九六八年（昭和四十三年）田んぼで稲刈り作業に精を出している矢先、高血圧と日ごろの過労が重なって、突然に倒れ意識を失った。家族の懸命な看護にもかかわらず、わずか一日で帰らない人となった。享年六十四歳だった。

辰治郎の業績について、次のように評価されている。

「・・県内同士に呼びかけて岩手県開拓協会の設立を主催した。この県協会を発火点として、東北そして全国の開拓者の組織ができたのは、全く氏（辰治郎）の熱意と実行力の賜物で、全国連盟は中央政治あるいは県政に働きかけて開墾補助金や営農資金の融資制度が確立され、全国開拓者の唯一のよりどころとなった。」

「氏のまいた種は、立派に実り、連盟も立派な後継者ができ、また

胆沢開拓も彼の夢が実現した」

開拓に生き、人々の心に夢を持つことと、努力することの尊さを植え付け育ててくれた佐々木辰治郎は、彼自身が切り開いた「一の台」（現・胆沢区小山一の台）の台地の一角にある「丑転霊園」の土に葬られ、安らかに眠っている。

＊参考文献

「胆沢・江刺の先人物語」胆沢・江刺の先人物語の会

本平　次男

石礫除去後